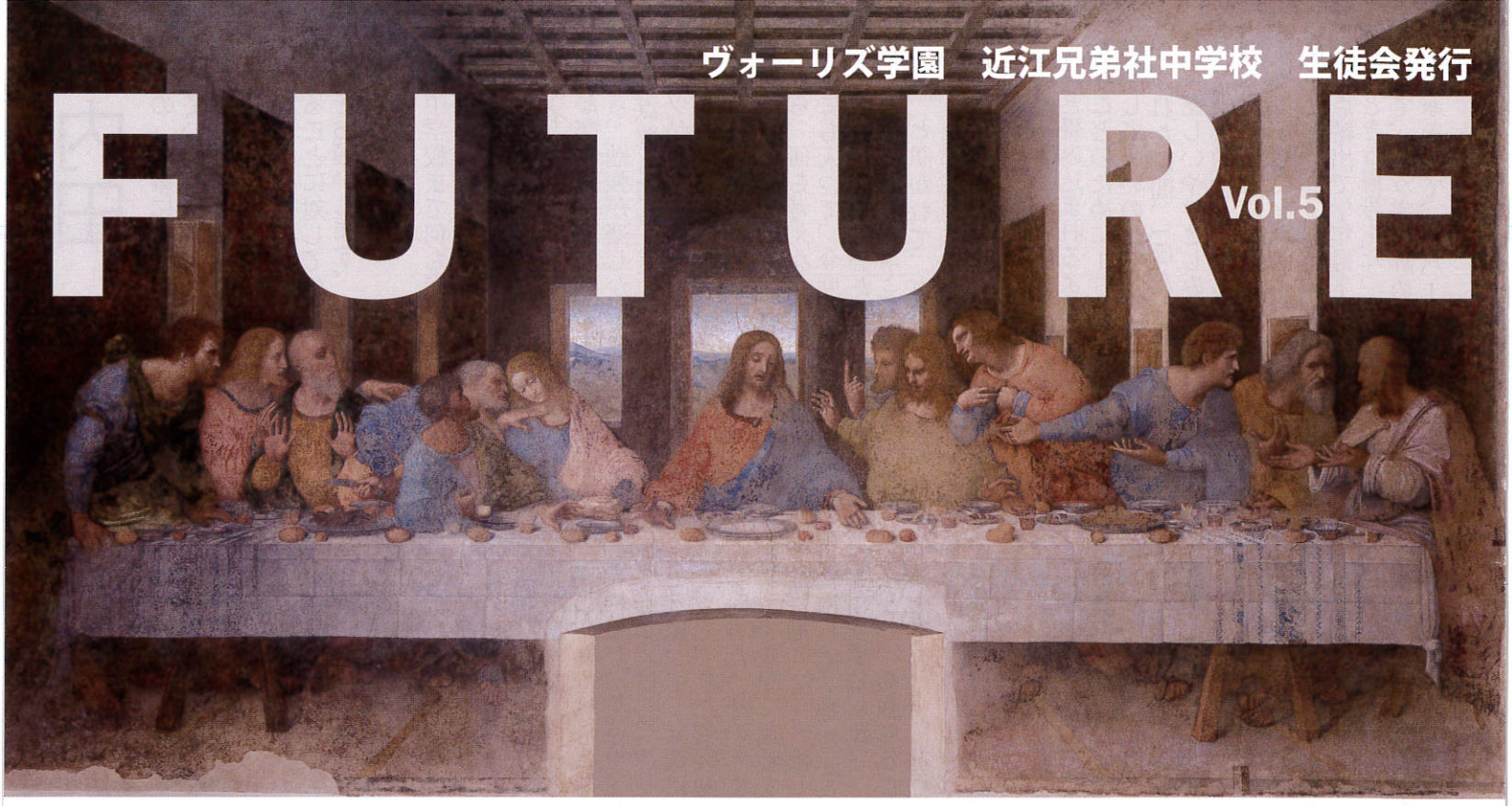
ヴォーリズ学園　近江兄弟社中学校　生徒会発行

FUTURE

Vol.5



2016

有識者と生徒会が
インタビューを通して
学んだ知識と知恵
これからの時代を
生きるための鍵はここにある。

インタビュー

京都精華大学人文学部客員教授
神戸女学院大学名誉教授
内田　樹

元町南京町中華街理事長
曹　英正

東京大学名誉教授
姜　尚中

ノートルダム清心学園理事長
渡辺　和子

リオオリンピック
シンクロナイズドスイミング
日本代表
乾　友紀子

同志社大学前学長　法学部　教授
村田　晃嗣

graha-inc代表取締役
shantiオーナー
谷田　和之

特集

春季短期留学

中学校生徒会

内田　樹

先生の「物事に対する有用性」の話を読ませていただいて、私は今受験生なので勉強を頑張っているけど、時々自分がなんで勉強をしているのかが分からなくなる時があります。だから、先生の「勉強をすることに対しての有用性」についてお話をお願いします。

僕は中学校まで何も考えないでただ勉強していました。実際に勉強は良くできました。それは例えば、足の速い子が、陸上部で一生懸命練習してタイムを上げて、「インターハイ優勝するぞ」みたいなのが楽しいのと同じです。勉強ができたから、勉強が楽しかった。やればやるほど点数も順位も上がるし。それはスポーツができる子や踊りがうまい子や音楽ができる子と一緒です。僕の場合は、受験勉強が得意だった。全然苦にならなかった。

だから、何も考えないで勉強して、いい高校にも入って、今度は大学受験めざして引続き勉強していた。高一の秋に、同級生の子に「なんでそんなに勉強するの？」と訊かれて、びっくりしました。「え？　東大行きたいから」と答えたら、「東大行ってどうするの？」と続いて訊かれて、「え？　朝日新聞とか入って」と答えたら、「どうするの？それで」と次々と畳み込まれるように訊かれて。「そんなことのために16歳の青春の日々を費やしていいの？空しくならない？」と言われた瞬間、「ほんとうだ、よく考えたら空しいや」としみじみ感じてしまった。受験勉強がバカバカしくなってしまった。一夜にして。で、もう全く勉強する気がなくなって、そのまま成績が急降下して、高2の時の前期の中間試験では0点続出で学年最下位になった。入学したときは優等生だったんですけどね。それで、もう学校辞めて、働こうと思って、家を出て、アパート借りて働いた。でも、中卒の肉体労働だから、安いの。時給100円。だから、月末になるともうご飯を食べるお金もない。水を飲んでおなかを膨らましてごまかした。高校のときの不良仲間ももう遊んでくれないし。中華料理屋の前を通った時に、中の人たちがラーメン食べてるのを見ても、空きっ腹を抱えて素通りするしかない。育ち盛りの17歳にとってはつらいですよ、これは。飯が食えないということのつらさと寂しさをそのときに思い知りました。

この空腹と受験勉強の無意味さとどっちがつらいか比べたら、受験勉強なんてピクニックみたいなもんだと思いました。無意味かも知れないけれど、ぜんぜん楽ちんじゃないですか。家にいれば、腹一杯ご飯も食べられるし、暖かい布団で寝られるし。しばらく我慢して、大学に入ってしまえば「こっちのもの」なのだから。そう思って、父親に頭下げて、また家に戻って、また受験勉強を始めた。結構楽しかった。その年に大検通って、同級生より半年早く高校を卒業して。一年予備校に通って、一浪して大学入試にも無事合格して、そこからは「さあ、遊ぶぞ」という感じした。

だから、勉強すること有用性についての僕のその時点での結論は「意味がない」です。でも、意味がないけれども、これを放棄して「じゃあ労働する」っていうことになると、それはそれで大変です。中卒の労働者として働いていく、それを60歳、70歳まで続ける。それにあまり意味を感じなかった。時給100円の日々の労働に、とりわけ価値があるとも思えなかった。僕ができるような仕事は誰でもできるしね。僕がいなくてもいくらでも代わりがいる。皿洗いに熟練したからって、何一つ、自分の中に技術として蓄積されるものはないし、飲食店で働いてまわりの大人たちからとくに感化されるということもなかった。そのままここにいるうちに人間的な成熟が果たせるようになるとはとても思えなかった。

それに比べると、受験勉強は、とにかくしている限りは何らかの情報や知識や技能が身に付くわけですよ。お皿を1000枚洗っているのと、英単語1000語覚えるのとでは、どちらもやっているときは空しいけれど、結果としての有用性にはずいぶん差が出る。それは学校を辞めてわかりました。

好きなだけ勉強できる環境にいるというのは、よく考えたら天国ですよ。世の中には勉強したくてもできない子どもたちがいっぱいいるんだから。受験勉強が生きる上で役に立つとはなかなか申し上げにくいですけれど、それでも君たちの歳で選べる選択肢の中ではかなり「まし」な方だと思います。

内田先生は、ヴォーリズさんの建物を「生き物だ」と喩えておられましたが、僕は、生き物はそれぞれ何かを伝えるために一つ一つ精一杯生きていると思っています。内田先生からみて、ヴォーリズさんの建物は何を伝えるために建っているのだと思いますか。

ヴォーリズさんの建物って、いろいろ特徴があるのですが、やっぱり、「悪戯心」でしょうね。ちょっと可笑しい仕掛けがしてあって、「これに気が付くヤツいるかな」という建築家の底意が透けて見える。「自分が設計段階で仕込んだこの仕掛けに気付く人は、いつ出てくるだろう。もしかしたら50年、100年出てこないかもしれない。でも、気がついたら驚くだろうな」というような悪戯心があります。今から何十年も後に、自分の設計した建物で暮らす人が、ふとしたきっかけで建築家の仕掛けに気づく。そのとき、その人は死せる建築家からの「贈り物」を受けとることになる。そういう未来の住人を想像して設計している。

僕は着任したときに、ヴォーリズ設計の神戸女学院の中にある図書館本館に研究室をもらって、そこに震災後までいました。本館の研究室って結構暗くて寒かった。でも、とても居心地のいい空間でした。でも、その研究室は正方形じゃなくて、「へこみ」がある。廊下に出てみると、廊下の途中に「へこみ」があって、ソファーと机が置いてある。「これはなんだろう？」と思っていました。あるとき、二階の図書館の閲覧室からの階段を降りてきた学生たちが、おしゃべりしながら、そのソファーに座ったのです。それを見て、ヴォーリズが何を考えてそんな「へこみ」を作ったのか、わかりました。会話禁止の図書館閲覧室でずっと並んで勉強していた学生たちが、閲覧室を出て、堰を切ったようにおしゃべりを始めた。階段を下りきったところで、左右に分かれないといけないんだけれど、話がまだ終わらないので、別れがたい。そのとき、ふと横を見ると廊下から凹んだところに、いかにも「おしゃべり用」のソファーと机がある。暗くて寒い廊下のさらに「へこみ」ですから、長居はできない。でも、おしゃべりの続きを10分間というような用途には絶好のものです。そのとき「なるほど！ヴォーリズさんはこういう用途を考えて、ここに『へこみ』を作ったのか」と腑に落ちました。建物の機能とか、空間の有効利用とかいうことよりも、現実にそこに暮らして、日々の生活を送っている学生たちの、歩いたり、階段を上り下りしたり、しゃべったり、ご飯を食べたりという具体的な動きを想像して建物を設計している。その暖かい想像力に感動しました。

神戸女学院大学の一番古い建物は中庭を囲んだ四棟でできていて、そのうち、理学館と文学館は東西に向かい合って立っています。建物の高さも幅も同じなのだけど、中の間取りが全然違う。驚いたのは、文学館は2階建なのに、理学館は3階建だということです。外から見たら同じなのに、理学館の中に入ると「隠し階段」があって、「隠し3階」があって、そこに研究室があって、そのさらに先には「隠し屋上」がある。それは中庭からも他の建物からも見えないんです。でも、理学館のその「隠し屋上」からは六甲山が一望できる。素晴らしい風景なんです。

でも、この素晴らしい風景は好奇心に駆られて、「隠し階段」を上って、「隠し三階」を探り当てて、その先のドアを開いた学生しか見ることができない。好奇心に駆られて、知らない階段や知らない廊下に入り込み、ドアノブを回した人にだけ与えられる「ごほうび」なんです。歩いていて、気になる扉や階段に出会う。それがどこに続くのか知りたいと思って、思い切ってドアノブを回し、階段を上る。すると、建築家が「ごほうび」を用意してくれている。それは「ふだんは見ることのできないすばらしい眺望」か「ふだん見慣れているキャンパスや学舎の、ふだんとは全く違う姿」なんです。

ヴォーリズは「校舎が人を作る」という言葉を遺していますが、彼の建物はまさに「学びの比喩」になっていると僕は思います。「学ぶ」というのは、まさにそういうことですから。学びを通じて、学生たちは今まで一度も見たことのない広々とした眺望を手に入れ、自分たちが熟知していたつもりの世界の、それまで全く知らなかった相を見る。

「校舎が人を作る」っていうのは、静かな環境で気持ちよく暮らしていると勉強がはかどるとか、そういう実利的な話じゃないんです。死せる建築家と生きている学生生徒たちの対話が建物を介して行われるという、もっとダイナミックで、もっと霊的な経験なんです。「建築ってこんなに力があるのだ」ということを僕はヴォーリズ建築で初めて知りました。

父は安全保障関連法案に賛成しているのですが、私は反対しています。平和をつくりだすべき僕たち日本が戦争の手助けをするのは、絶対にあってはならないことだと僕は考えています。しかし、もし日本が実際に戦争に参戦し始めたとき、将来日本はどのような状態になるのか内田先生の見解を教えてください。

どういうかたちで戦争が始まるかは僕にもよくわかりません。今のところPKOで派遣された治安の悪い土地で、現地の内戦やテロに巻き込まれるかたちで発砲するということから始まるだろうという気はします。でも、まだ法律的な限界があるので、戦闘行為に入るのは難しいと思います。日本国憲法では、九条で戦争を放棄していますから、戦闘行為を行う事態そのものが想定されていない。戦争っていうのは、ある意味では外交の延長ですから、戦時国際法にいろいろな取り決めがある。宣戦布告をしてから攻撃しなければならないし、停戦協定を締結したらその間は戦闘行為をしてはならないし、捕虜に対してはジュネーブ条約を適用しなければならない、とか。戦争は完全な無秩序状態ではなく、一応条理が通っている。守らなければならないルールがある。でも、日本の場合は「戦争をしない」ということが前提なので、戦争が始まったらどうするかについてのルールがそもそも存在しない。法律に宣戦布告規定がないから、宣戦布告できない。また軍法についての規定がないから、自衛隊員の戦闘中の違法行為は刑法で裁かれることになる。そういう法整備を行わないと、戦争を始めることはできない。

だから今、今度からPKOで駆けつけ援護ができるとか、武力行使ができるとか言っていますけれど、実際には武力行使の法的基盤は無いに等しい。だから、現地の司令官が自己責任で判断しなければならない。それはあまりに気の毒だと思います。本当に戦争をしたいのなら、まず憲法変えて、法律も変えるしかない。それをしないと、戦闘行為があっても、日本の自衛隊員だけは戦時国際法の適用を受けられない。軍事捕虜として保護もされない。

でも、南スーダンのような戦地へ自衛隊を派遣すれば、法整備がなされないうちに偶発的に戦闘が始まってしまう可能性はつねにあります。例えば、自衛隊員と内戦やテロに巻き込まれて死傷した場合、メディアが熱狂して、「日本人が殺された。絶対に許せない。復讐だ」みたいな煽りをするでしょう。大騒ぎになる。これが戦争を始める古典的なやり方なのです。

アメリカはアラモの砦からあと、基本的にずっとそう戦争をしてきました。まずどこかでアメリカ人が死ぬ。そして、「報復だ」「同胞の死を犬死にしていいのか」と世論を煽って、「反戦論者は非国民だ、売国奴だ」と言って反戦論を一蹴する。アメリカはそうやってメキシコともスペインともベトナムとも戦争してきたし、テキサスもカリフォルニアもハワイもキューバもフィリピンもそうやって手に入れました。当然、日本政府もアメリカの先例に倣うつもりでいると思います。まず、どこかで自衛隊員か在留邦人に死んでもらう。「血の復讐だ」という世論の熱狂を背景にして、憲法を改定し、戦争法制を整備して、軍を派遣して、以後、戦争が常態化する国のかたちを作る。それが今の政権が描いているヴィジョンだと思います。そして、一度海外派兵されて、死傷者が出たら、高い確率で、あとは彼らの計画通りにことは進むだろうと思います。

内田　樹（うちだ　たつる）
1950年、東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒業、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。専門はフランス現代思想、武道論、教育論など。合気道凱風館師範。京都精華大学人文学部客員教授
神戸女学院大学名誉教授

元町南京町中華街理事長
老祥記　三代目店主

曹　英生

この町で豚まんを作ろうと思ったきっかけはなんですか。

私が創業者ではなく、私の祖父が仲間と共に中華街を作りました。祖父は中国出身で、明治の頃、横浜で働いた経験がありました。上海に戻り数年がたった頃、神戸で仕事をしている友達から誘われて、再び来日して、神戸で商売を始めました。その商売で、父の得意だった豚まんじゅうを作ったのが、豚まんの始まりです。中国では豚まんのことを「包む子ども」と書いてパオズと言います。父は、それでは日本の人たちは意味が分かりにくいので、「豚まんじゅう」という名前を付けました。それが浸透して、「豚まん」と呼ばれるようになりました。

味付けも、日本の人たちが馴染めるようにしようということで、ほとんど醤油だけで味付けをしています。そして、うちの豚まんのこだわりは豚まんの皮です。皆さんが知っているまんじゅうで使われているイーストは使っていません。普通の人でも扱いやすいのがイーストです。うちでは麹を使っています。麹は、日本酒を作るときに使われるもので、それを使うと、とても風味があり、弾力がある皮ができます。

この南京町で百年前、祖父と祖母がやりだしたのがきっかけですね。

中華街の歴史を教えてください

日本が江戸時代から明治になった年に神戸港が開港しました。その前から横浜などの港は開港していましたが、十年遅れて神戸港は開港し、多くの欧米人がビジネス、商売を目指してこの神戸にもやってきました。そのとき一緒に上海から中国人も来て、通訳などの仕事に就きました。中国人は、三つの刀と呼ばれる仕事をしました。一つ目は、はさみを使う「散髪」です。二つ目は「仕立て」です。当時の日本には、着物で洋服を作る技術を知る人はほとんどいませんでしたから、中国の人が来て欧米人や日本人の服を作りました。

そしてもう一つが中華料理を作る「包丁」という名の刀。この三つの刀が当時の中国の華僑の大きな仕事でした。もちろん、通訳や日本より優れた技術があったペンキ職人もたくさん来るようになりました。これが南京町の最初の生い立ちです。急に一六六八年にできたのではなく、徐々にジワジワと十年、二十年かけてこの町ができました。場所も最初はここよりもう少し南の倉庫とか港に近いところでしたが、年月をかけて、ここに中華街ができました。

中華街は、繁栄してきましたが、第二次世界大戦の空襲などを受けて神戸が焼け野原になってしまいました。そこで一度、中華街は火事で消滅してしまったのです。中国人はほとんど離散してしまい、本当に一部の中国人だけがこの場所で商いを続けました。三十五年前ごろ、我々は「ここを観光地にしよう」と決めました。そして、今のようなにぎやかな町に戻すことができました。

仕事でどのようなことにやりがいを感じられますか。

商売では、やはりお客さんが来てくれることが嬉しいですね。それから、「美味しかった」という言葉ですね。お馴染みさんが増えたり、そこからまた新しい友だちを連れてきてくれたり、家族と食べに来てくれたり、そういう瞬間というのは商売人にとって商売人冥利に尽きます。

また、我々にとっては阪神淡路大震災のことは忘れられません。二十年前のことです。神戸でもビルが倒壊したりしましたし、南京町も大きな被害を受けました。水もでないし、ガスも使えないし、電気もつかない、そんな状況で商売ができないことの苦しさや辛さを体験しました。今までお客さんがたくさん来ていたのに来なくなりました。一瞬の十五秒くらいの揺れで様変わりしてしまって廃墟といいますか、ゴーストタウンみたいになりました。建物は潰れているし、その下で下敷きになってお亡くなりになられた方もおられました。

その中で、南京町では、震災二週間後には炊き出しをしました。神戸の人に熱いものを食べさせてあげたくて、熱いラーメンや豚まんなどを提供してほんとに多くのお客さんに来ていただけました。その時、自分がこの仕事をしていて社会貢献ができたように感じる瞬間がありました。人としてそういう感情を持てたこと、自分の仕事に誇りが持てたことは本当に良かったと思っています。これは、商売している者にとっての幸せです。

先ほど、豚まんの皮にこだわりで麹を使っていらっしゃるということをお聞きしたんですが、それ以外でなにか美味しい豚まんを作る秘訣などはありますか。

最終的には料理は愛情ということです。いかに大切に作ることに集中できるかです。たとえば、豚まんには麹を入れますが、大事なのは一つ麹を入れて作る他に、何か一つ工夫をすることです。それは一つ一つの動作とか気持ちです。それが一つのこだわりです。出来上がりが全然違います。

それと、うちは必ずその日に売り切る、残さないことを徹底しています。売れているからといって前日に作って売ることはしません。その日にできたものをお客様に食べていただく、これが大前提です。少々売り上げが下がってもそれでいいのです。その時に一番いい状態でいただいてもらう、それが百年間商売できた秘訣ですね。

姜　尚中

僕は、幼稚園から中学校までキリスト教学校に通っています。キリスト教主義の学校に通うことの意義は何ですか。また社会に出た時にこの経験はどのように生かされるでしょうか。

私自身は熊本で育ち、市内の小学校、県立高校に通いました。今思うことは、やはりみなさんと私のような学生生活を送った者との決定的な違いは、礼拝の体験をしているということです。皆さんは毎日、礼拝を守っておられますよね。その繰り返しの中で、礼拝をすることが自分の中で習慣化していきます。礼拝を毎日繰り返していると、礼拝、祈ること、聖書の言葉を聞くこと、讃美歌を歌うこと、こういうことが日常生活の当たり前のものになると思います。でもこのような感覚を持てることは、日本全体でみると極々少数派なことなのです。普通の人は礼拝堂、チャペルに入るだけで、特別な気持ちになるわけです。みなさんは、自然とクリスチャンニティーを受け入れていて、祈る気持ちになれる、それに入っていけるということです。ヴォーリズさんは、私たちは神の神殿であるという言い方をされていました。日々の礼拝の体験が、あなたたちの中に神の神殿を創り上げていくのだと思います。また、アジア、日本でクリスチャンであること、キリスト教主義の学校に通うということは、基本的には少数派です。そこで大切なことは、少数派であることを恐れないということです。自分とは違う人と関わるとき、多数派と関わるときや話をするときに、臆することなく、自分自身の経験に誇りを持って語ることが大切です。少数派が自分自身の立場を誇りに思い、公に話が出来る時、大きな成長が得られます。この二つがキリスト教主義学校で青年期を過ごすことの意義、将来に生かされる力だと思います。

先生は、オモニという本を書かれています。僕はまだ、自分の人生に母親の存在がどのような意味を持つかはわからないのですが、先生にとって、今の生き方にとって、先生のお母さんの影響は大きいものですか？

とても大きいですね。たぶん男の子と女の子で違うのかもしれないけれども、私の場合は、一言でいうとマザコンだったのです。マザーコンプレックスは、一般には母親に溺愛されることを指します。私の場合は、母親は仕事をしていたので、溺愛しながらも距離感があったのです。それがよかったと思っています。

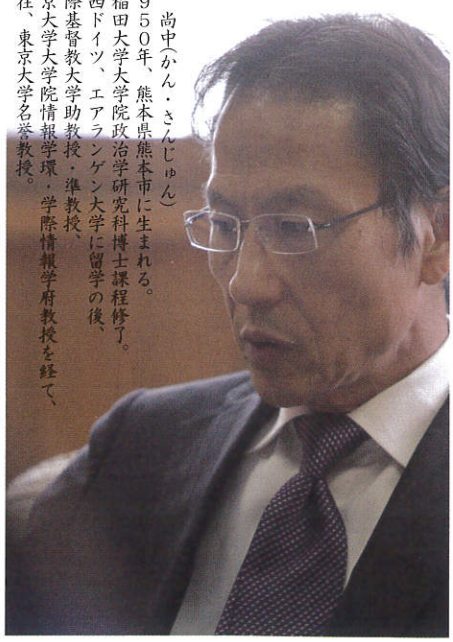
母親から影響を受けたこと、それは、人間は自然のリズムの中で生きていないと幸せではないということです。私の母親は、旧暦で生きていたのです。旧暦の場合、自然現象と生活とがうまくかみ合います。たとえば、何月の何時頃、海が満潮になるかとか、どの季節になると比較的に海が引けていくのか、どういう季節に魚を食べると身が締まっていておいしいのか、貝とか蟹はいつがおいしいのか。こういうことは旧暦で生きている人には大体わかるのです。こういう習慣が母親には生活の中で根付いていたのです。こういうことを教えてもらいました。

もう一つ母親が私に教えてくれたことは、かならず3度ご飯を食べるということです。ヴォーリズ先生も身体は神の道具だから、自分だけのものではない。そのためには節制や自分自身の身体の健康を気遣わなくてはならない、と述べておられます。一番大切なことは、誰とどこで何をどんなふうに食べるかです。だから、いろんな人と一緒にご飯を食べた経験があります。我が家には、出入りする大人が大勢いて、その人たちと一緒に、季節の一番おいしい物、決して高くはない物を食べました。母親は旧暦で生きていたので、何に一番栄養があって、おいしいのかが分かっていたのです。自然のリズムの中で生きないと人間は幸せになれないということ、日々何を誰と食べるのかが大切であること、この二つを母親から学びました。

先生が出演しているポッドキャスト「学問のすすめ」を聞かせていただいたのですが、そこで姜先生は、文明化とグローバル化に対して批判的な意見を述べておられました。私も授業で文明開化とグローバル化について習ったのですが、そんなに悪いイメージは抱きませんでした。一つの国とか、一つの場所だけにとどまっているよりも、世界中とつながった方がいいのではないかと私は思ったのですが、姜先生のお考えを教えていただけますか。

私が、なぜ否定的なことを言ったかというと、あまりにも肯定的なことをみんなが言いすぎるからです。やはり、明と暗があります。影の部分をあまり言わないまま、なにかマジックワードのようにグローバル化、グローバル化と言っている。影の部分を知らずに、グローバル化がいいことのように思ってしまっている人が多くいると思うのです。現在の日本では、グローバル、スーパーグローバル大学と東大や京大、特定の私学がこれを名乗って、海外に出ることを推し進めています。でも、影の部分では、エボラ熱という問題が生じています。いつかは海外に出られなくなってしまうかもしれません。たとえば、エボラ熱が発生すると、飛行機に乗ることが怖くなるでしょう。エボラ熱というものに罹患したらどうしよう、と不安になります。それから過激派組織ＩＳ＝イスラミックステートのような国が出てきています。もう一度ハイジャックのような形で飛行機が狙われるかもしれない。そう考えると怖くなりますよね。

私が、否定的なことをあえて言っているのは、こういう不安になる暗い部分を知ること、それをしっかりと受け止めたうえで、グローバル化に対応していきましょうということを伝えたいからです。良い部分だけしか知らずに悪いことがあると人間はパニックに陥ります。今、この影の部分が出てきているわけです。エボラ熱は将来どうなるかわかりませんが、考えてみると、ＩＳは中東、エボラ熱はアフリカ、そういうグローバル化からどちらかというと取り残されたり、問題があったりすると思われたところから、ブーメランのように、それが自分たちの社会に戻ってきているわけです。これにみんながパニック状態になると、非常に強い反動が出てきてしまいます。だから、物事には、明と暗がある。「英語を勉強して、そして情報を発信して、外国の人とコミュニケーションして、自分の小さな領域から世界に出ていきなさい、これがグローバル化だ。志を持って、世界に出ていきなさい。」ということが強調されるところ、そこには、世界というものが今どうなっているかというメッセージがないと思うのです。世界はやはり、必ずしも良くなっているわけではないし、世界はただ闇の世界が支配しているわけでもない。だからグローバルに生きるということは、ポジとネガ、明と暗、この両方を引き受けるということ、良いところだけをいいとこ取りするのではなくて、悪いところは見ようとしないではなくて、明と共に暗の部分も引き受けるという強い覚悟が必要になのです。「ゴミの焼却炉をどこに作るか」、「原子力発電所の処理施設をどこに作るか」という問いに対して、「他の地域ではいいけれども自分のところは避けてもらいたい」、「原子力は必要、でも処理施設は必要ない」という考えは、「自分たちだけ良いとこ取りできればいい」という影の部分を無視した発想です。そうではなくて、世界には明と暗があることを知らなければならない、受け入れなければならない。グローバル化はもう避けることができないところまで来ています。夏目漱石という人は、１００年前に「涙を呑んで上滑りに滑っていかざるを得ない。」と言っています。夏目漱石は、文明開化が１００％良いとは言っていない。でも１００％悪いとも言っていない。「避けられないものである」と言っているのです。だから日本は、これを上滑りに座っていかざるを得ないという覚悟を持ったわけです。だから、私が暗い部分を言うのは、覚悟を持ちなさいということを伝えるためです。エボラ熱に我々は罹患するかもしれない、それでも飛行機に乗る、ハイジャックされるかもしれないけれど、それでも飛行機に乗る、そういう覚悟がないと物事が進まない、私が文明開化やグローバル化を否定的に述べていたのは、こういう意味を込めているのです。



姜　尚中（かん・さんじゅん）
１９５０年、熊本県熊本市に生まれる。
早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。
旧西ドイツ、エアランゲン大学に留学の後、
国際基督教大学助教授・準教授、
東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授を経て、
現在、東京大学名誉教授。

渡辺和子

私事なんですけど、絵を描くことが好きですが、最近忙しくて絵を描く時間がありません。どういう考え方をすればいいですか？

つまり、勉強も同時にできて、好きな絵も描きたい。ところが時間があまりそれを許さない。そうですね、あなたがどの程度天才かどうかわからないんですけど、優先順位って言葉があるんですよね。どちらがより大切かということと、今のあなたにとって勉強に力を、また時間を割くことの方が大切なのか、それをある程度怠けてでも絵を描き続けることの方が大切なのか、priority というもの、つまり優先順位というものを自分の中で打ち立てないといけない。そしてどんなに絵がかきたくても宿題をしなければならない時には、宿題を私だったらしますよ。だって、変わらないもの。悩んでいるだけでは。だからどっちかにきりをつけて、勉強はそこそこ、そして、絵もある程度描けるということをお選びになるか、絵は二の次、三の次にしてとにかく勉強して、高校へ行くことを priority になさるんだったら絵はちょっと置くとかね。それか、何かむだなことはしてませんか？それをしながら今の質問をしても私は答えません。人間はしたいことと、しなければならないことがあった時にはしなければならないことを優先すべきです。

『置かれた場所で咲きなさい』には、たくさんの言葉がありましたが、先生が一番大事にしている言葉は何ですか？

「置かれた場所で咲きなさい」という言葉は自分にとって大事なことですよ。人に言うんじゃなくて。私自身が今までたくさんつらいことを味わってきましたけど、その時その時に逃げたいと思ったけど、「ああ、逃げちゃいけない。ここが私の居場所。神様がお植えになったところ。だから間違いがあるはずがない。この世の中にむだはない。だからこれをする。」そういう風に生きてきました。

「美しい生き方」ってどのような生き方ですか？

「美しい」の他にどんな言葉がありますか？反対語は？「美しい生き方」は何ですかと言われても非常に漠然としているので、おひとりおひとりの考え方が違うかもしれない。私はマザー・テレサの通訳をさせてもらって、マザー・テレサは着てらっしゃるものこそ本当にみすぼらしい。召し上がるものも粗末なもの。ただ、マザー・テレサの姿、お顔、お声、全部美しいと思いました。多分その理由は、マタイの25章ですかね。「わたし兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなおである。」このイエスの御言葉を本気で受け止めた。だからみんなが嫌がるハンセン病とかエイズとかエボラとか、そういう人々が嫌がる病気の人、それから生みたくないけど中絶するお金もなくて望まれないで生まれた子供、そういう子たちを何の報酬もなくお育てになって養子にしてあげたり、それから、お年を召して皆から捨てられたようなそういう人たちを手厚く介抱してあげたりしていた。だから、ここにいる学生、2300人くらいいるんですけど、女子大生ですけど、あなた方はお化粧はよくしてるお化粧は人をきれいにするけど、美しくはしない。美しいというのは心との戦いです。

先生がお祈りをするときにどのようなことを考えていますか？

お祈りっていうのは「家庭円満」「合格」とかそういうのをお考えになりますか？「世界が平和になりますように」とか？お祈りっていうのは何なのかと考えると、私にとってのお祈りは神様とお話しすることなんです。自分のことよりも、マザー・テレサもそうでしたけどいつも人のことをお祈りしてらっしゃいました。それも「してください」と言った後が大事なんです。でも、私が望んでますけど神様あなたのいいようにしてください。いつも自分のためだけに祈るのは利己主義ですね。マザー・テレサが1979年にノーベル平和賞をいただいた時に行っていたことは、無私無欲で困っている人を助けるということでした。マザー・テレサがいつも祈ってらっしゃったことは「自分が健康でありますように」「自分の事業が成功しますように」ではなくて、「私がしている事業を通してより多くの人々が幸せになりますように」「私はこれを我慢しますから、どうぞ今苦しんでいる人が少し苦しみが和らぎますように」です。あなた方もクリスチャンの学校だと思います。ご自身がクリスチャンかどうかは別として。そのときに大事なのは自分のためだけではなくて無償で見返りがあるとかないとか別にイエスがおっしゃっているように自分がされて嬉しかったことを人にしなさい。人々のために祈りましょうよ。努力しましょう。そしたら美しい人になれます。

渡辺　和子（わたなべ　かずこ）
ノートルダム清心学園理事長
著書に
『置かれた場所で咲きなさい』
『幸せはあなたの心が決める』
『面倒だから、しよう』
『目に見えないけれど大切なもの』など多数。

リオオリンピック日本代表

乾　友紀子

本学園、幼小中高の卒業生、乾友紀子さんが、ロシア・カザンで行われた『二〇一五世界水泳』でシンクロナイズドスイミング「デュエット・テクニカルルーティン」「チーム・テクニカルルーティン」「チームフリー」「フリーコンビネーション」の四種目で銅メダルを獲得しました。

八月十日（月）、お忙しい中、乾さんを本学園に招き、講堂にて報告会を行いました。

学園長からは「乾さんが、学園にあった昔のとても小さなプールで元気に泳いでいた姿を懐かしく思い出します。あんな小さなプールから、今、世界に大きく羽ばたいている姿を見ることができて大変嬉しい。この学園、グループ、地域、日本全体で乾さんの活躍を応援しています。」という激励のメッセージがありました。

乾さんからは「世界水泳四度目のチャレンジで、今回初めてメダルを獲ることができました。来年リオで行われるオリンピックに向けて大きな励みになります。メダルを獲るのが遅くなってしまいましたが、こうやって母校に報告に来ることができて本当によかったです。これからますます頑張ります。応援どうぞよろしくお願いします。」と力強い言葉をいただきました。

また、その後のインタビューでは、学生時代の宿題や課題は、滋賀から大阪の井村シンクロクラブに通うまでの約二時間の電車の中で取り組み、学習時間を確保していたということや、練習の合間にスポーツゼリーでカロリー補給しつつ、一日に四五〇〇kcalを目安に摂取するようにしているが、それでも練習が終わると体重が一・五kg落ちていることもある。水に入っていても汗かいているので、水分補給をしないと体重が減ってしまうというような裏話を聞くことができました。

（※成人女性の一日の必要摂取カロリーの平均は一五〇〇kcal前後といわれています。）

乾　友紀子

（いぬい　ゆきこ）

二〇一二年
ロンドンオリンピック
デュエット五位
チーム五位

二〇一五年
世界水泳選手権
ソロ・テクニカルルーティン五位
デュエット・テクニカルルーティン三位
チーム・テクニカルルーティン三位
ソロ・フリールーティン五位
デュエット・フリールーティン四位
チーム・フリールーティン三位
フリーコンビネーション三位

二〇一六年
リオデジャネイロオリンピック
出場決定

同志社大学法学部教授
村田晃嗣

新聞やニュースで2020年に開かれる東京オリンピックについて取り上げられています。その中で、東京オリンピックが、日本の経済に大きな影響を与えるという記事が印象に残りました。しかし、僕は、5年前に起こった東日本大震災の復興を優先して進めていかないといけないと思います。村田先生は、どのように考えておられますか。

オリンピックと東日本大震災からの復興のどちらかが先とは考えません。もちろん、東日本大震災からの復旧と復興というのは、多くの人たちがまだ家を失ったままであるとか、あるいは職を失ったりして非常に苦しい状況に置かれている状況がありますので、これは、着実にやっていかなければならないことだと思います。しかし、「じゃあ、それが大事だからオリンピックはどうでもいいのだ。」とは思いません。なぜなら、オリンピックに刺激されて、建築などの事業がなされることは、経済を刺激することにつながるからです。東京オリンピックに日本の経済が刺激されて、日本の経済が強くなることが、東日本大震災への復旧や復興に力を割く源になります。

もし、復旧復興だけにしてしまったら、どんどん内向きになっていって、復旧復興もあまりできなくなってしまうかもしれません。だから、「東京オリンピックを成功させて、東京の街が活性化して、日本全体が潤うのだ。繁栄するのだ。」という期待の中で、経済が大きくなっていく、このことが、東日本の被災地の復興にもつながると私は思います。

ただ、もっと難しいことは、東京オリンピックはこれで2回目になります。1回目は昭和39年、1964年、私の生まれた年です。私は、もちろん1回目の東京オリンピックのことは記憶としては何も覚えていないのですけれども、1回目のオリンピックがあった頃というのは、第2次世界大戦が終わってから19年たったところで、「戦争が終わってから20年近く経って、ここまで回復した。」、「これから日本は、経済大国になるのだ。」「どんどん、どんどん日本は豊かになるのだ。」という様に、東京オリンピックの後の日本がどうなるかという期待だとか、イメージとか、夢みたいなものがあったと思うのです。

このオリンピックの後のイメージがあったということがすごく大事だったと思うのです。ところが、今の我々の問題は、2020年に東京オリンピックをやるということは、1つの目標ですけれども、オリンピックの後に、この国がどうなっていくのかという、みんなが共通して持てる夢とか、イメージが無いということです。ですから、オリンピックの後に、この国がどういう風に進んでいくのか、という共有できる夢やイメージを作っていかないといけません。オリンピックの後に、様々なことがダメになるというのが、私は実は1番怖いことだと思っています。

僕は今、中学1年生なのですけれど、僕の年から現在のセンター入試が廃止されて新しい入試制度に変わると知りました。新しい大学入試に向けて、具体的にどのようなことを今から準備していくことが必要でしょうか。

新しい入試制度は、今のセンター試験の様に、個別の知識を確認するものではなくなるでしょう。様々な事柄について、自分自身の考え、意見を持てているかが問われることになると思います。また、英語なら英語だけとか、数学なら数学だけの問いではなく、英語と数学が組み合わさった問題なども出題されるでしょう。実際、社会で働く中では、科学の知識だけとか、あるいは数学の知識だけが必要な場面は限られています。何かをするためには、数学の知識と科学の知識とか、あるいは歴史の知識と国語力とか、いろんなものが組み合わせられないと役に立ちません。

また、科目に分かれているものを結びつける力も必要です。たとえば、歴史には日本史と世界史の科目があります。でも、それらは独立して存在しているものではありません。なぜなら、世界史の中に日本史があるのであるからです。世界史と関係なしに日本史があるのかといったら、それはフィクションです。日本史、世界史、政治経済、公民などの科目に分けられていますが、実際、それらは不可分なものです。政治経済なんて、かなりの部分は現代史ですから。科目が分かれているのは、教える側の都合です。フィクションとして分けたいわけです。

実際に生きていく上では、政治経済の知識も地理の知識も、それから現国の知識も、みんな総合していくわけです。だからそういう、複数の知識を総合できるような、そういう勉強を心がけるのが大事だと思います。そのためには、一見、勉強に関係のないような読書とか、あるいは映画でも、クラブ活動でも、直接すぐに受験勉強に役に立ちそうにないようなことが、実は国語の知識と社会の知識を結び付けてくれたり、数学の問題と理科の問題を結び付けたりする力になります。こういう意味で考えると、すぐに役に立つことだけを勉強していると、すぐに役に立たなくなってしまいます。無駄を覚悟で知的な好奇心を広げて、いろんなことに関心を持つことが大事だと思います。

私は、学ぶことについて「学問の向上」ということが思い浮かびます。村田先生は、学ぶことについてどのように思っておられますか。

出来れば、死ぬまで学び続けたいと思います。そうでないと、人間の成長が止まってしまいますから。今度本を書いたらそれで終わりとか、あるいは大学の先生を定年退職したらそれで終わりというのではなくて、自分が死ぬ日まで、最後までいろんなことを1つでも多くのことを知ろうとする、経験するという様に学び続けていきたいと思います。

それから、これは私の性分なのかもしれないし、私が学校の先生をやっているからかもしれませんが、自分が学んだことを人とシェアしたいと思っています。大学の教師として、自分が学んだことを学生たちに伝えて、学生たちがどんな反応をするのか、どんな質問をするのかに関心を強く持っています。私が気づかなかったことを学生たちが教えてくれることもありますし、私が答えられないような質問を学生から受けたら、答えるためには今度はどんなことを学ばないといけないのか、と考えられるからです。

だから、自分が学んだことを学生だけではなくて、友達とか、いろんな人、家族もそうかもしれないけど、いろんな人と共有しながら学びを続けていきたいと私は思います。

わたしには、目標というものが見えてないのですけど、夢や目標は自然と見つかるものなのでしょうか。

それは、わかりません。見つかるかもしれませんし、見つからないかもしれませんけれども、大事なことは、夢を見つけたいと思うことだと思います。夢や目標というのは、漠然と毎日を過ごしていても見つかるものではありません。毎日を生きていく中には、しなければならないことがたくさんあります。ご飯を食べないといけないし、寝ないといけないし、勉強だって少しはしないといけないし、友達とも遊ぶし、お母さんやお父さんともお話しをするし、このようにしなければならないことをしていると、時間はあっという間に無くなってしまいます。

ただ毎日を過ごしているだけで、ある日突然、夢や希望や目標が見つかるわけではありません。夢や希望や目標を見つけようとしなければなりません。そのためには、いろんな本を読んでみることが大切です。

君たちは、「自分が将来どんな仕事をやりたいのか、私にはわからない。」と思うでしょう。そもそも、君たち中学生が知っている職業は限られています。中学生の君たちにとっての身近な職業と言えば、毎日接している学校の先生とか、お

父さんやお母さんのお仕事とか、喫茶店とかレストランとかで働いてらっしゃる方に限られているでしょう。君たちが銀行員の仕事とか、それから電気会社の仕事とか、そんなことにすごく詳しいわけではないでしょうから、生活の中で知っている実際の職業の数なんかすごく限られてしまいます。そんな中から自分が将来どんな仕事に就きたいのかを考えても、選択肢が少なすぎます。

世の中にはたくさん職業があるわけです。ですから、「どんな仕事があるのだろうか。」、「その仕事は、どんなことをしていて、どういう風に世の中の役に立つのか。」、「自分がその仕事をすることでどんな生きがいが感じられるのだろうか。」ということを、自分で情報を集めて、自分で学ばなければ、イメージが持てません。自分で本を読んだり、テレビでもいいかもしれないし、雑誌を読んだり、インターネットで調べたり、いろんな先輩や先生たちとお話をしたりして、情報を集めることによって、夢とか希望とかのイメージを作り出せる土台が作られていくのです。本も読まずに、情報も集めずに、人と話もせずに、毎日同じように暮らしていて、夢や希望が持ちたいと思っても、できないと思います。夢や希望やイメージを作り出す土台を、どんどん広げる努力をしていくことが大事だと思います。

私は、合意には対立が必要だと思っています。対立することによって、相手の意見が聞け、合意によってより良い結果が得られると思います。実際、学校行事の文化祭の準備の中でも対立しましたが、対立で終わることなく、合意に持っていくことができ、誇りある発表ができました。でも、世界では対立によって戦争が起こってしまっています。そういう対立は必要なのでしょうか。

戦争で人が殺しあったり、テロで人の命が失われたりする事は、避けるべき事です。ですから、それを必要だという事はできません。しかし、避けることが出来るのか、と言うと、それも簡単なことではありません。

我々なら対立しても、話し合いによって、解決できるじゃないか、時間をかけて、話し合えば、なにも暴力に訴えたり、戦争をしたり、テロを仕掛けたりしなくても解決できるじゃないか、と思います。しかし、当事者にとっては、もしかしたら、命を懸けても戦わなければならない大事な事なのかもしれないのです。

例えば、我々にとってイスラム教のシーア派とスンニ派の違いは、大きな関心事ではありませんが、当事者にとっては、僅かな違いが、命を懸けても、守り通さないなければならないほどのものなのです。ですから、我々からすれば、無益な争いに見えることが、当事者にとっては、命を落としても、場合によっては他人の命を奪ってでも、争わないといけないことでもあるのです。

我々から見て、無謀な戦争や、テロや、争いをしている人達が、何を信じて、なぜそんなに激しい争いになっているのか、という事を、単に批判するだけではなく、まずそれを理解する姿勢が無いと問題の解決には繋がっていきません。

「暴力は危険だ」、「戦争は良くない」、と他人事で言っている限り、誰からも批判はされません。「暴力は良くない。」、誰もがそう思います。「戦争はあってはならない。」、誰もがそう言います。だから、そう言っていれば、実はすごく安全なのです。ですけれども、そう言っているだけでは、実は戦争も暴力も無くならないのです。「なぜ戦争は起こるのだろうか。」とか、「なぜ人は、この場合に暴力を振るってしまうのだろうか。」という事を当事者の身になって考えてみる。そういう努力が合意には必要ですし、それがなければ物事の解決に向けて前進しないと私は思います。

日本は、核兵器を持たない国です。しかし、世界では、「核」という重しが戦争を起こしにくくしているという現実があると思います。日本が戦争に巻き込まれないようにするため、平和な状態を維持し続けるためには、核を持つことは必要だと思われますか。

私は、そうは思いません。日本が核兵器を持つ必要性は非常に低いと私は思っています。それには、いくつかの理由があります。1つは、今から日本が核を持つことが与える日本国民、周辺諸国への影響です。アメリカは1945年から核兵器を持っています。ソ連も1949年、中国は1964年から核兵器を持っています。北朝鮮は、1990年代に入ってから作りました。こういう表現はふさわしくありませんが、もし、日本が、アメリカやロシアの様に昔から核兵器を持っているのであれば、1940年代とか1950年代とか、50年も60年も前から核兵器を持っているのであれば、日本が核兵器を持っているという事のインパクトはそんなに大きくないかも知れません。

しかし、日本は、戦後70年間「核兵器を持たない」と決めて、守ってきました。そして、唯一の被爆国であるという事で、核の凄惨さを折に触れて世界に訴え続けてきました。

そういう、70年間持たなかった国、しかも、唯一の被爆国だと訴え続けた国が、ある日突然、核兵器を持つという事は、周辺に非常にネガティブな影響を与えると思います。初めから持っていたのならともかく、今更、この70年間持たなかった国、しかも核兵器を無くそうと言い続けてきた国が、今になって核兵器を持つという事は、周辺諸国に非常に悪い影響を及ぼすと思いますし、おそらく、日本国民のものの考え方にも非常に悪い影響を与えるのではないかと私は思います。

それから、日本自身が核兵器を持っていなくても、日本は核兵器を持っているアメリカと同盟関係にあります。この意味でも私はアメリカとの同盟関係というのは非常に大事だと思います。アメリカと同盟関係にあるという事が、日本自身が核兵器を持つ必要のない大きな理由になっているのではないかと思います。

村田　晃嗣　（むらた　こうじ）
1964年、兵庫県神戸市生まれ。同志社大学法学部卒業、神戸大学法学修士を経て、米国ジョージ・ワシントン大学大学院博士課程（政治学）。00年、同志社大学法学部助教授（外交史・安全保障政策論）となり、05年、同志社大学法学部教授、同志社大学前学長

髪型を整えるコツを教えてください。

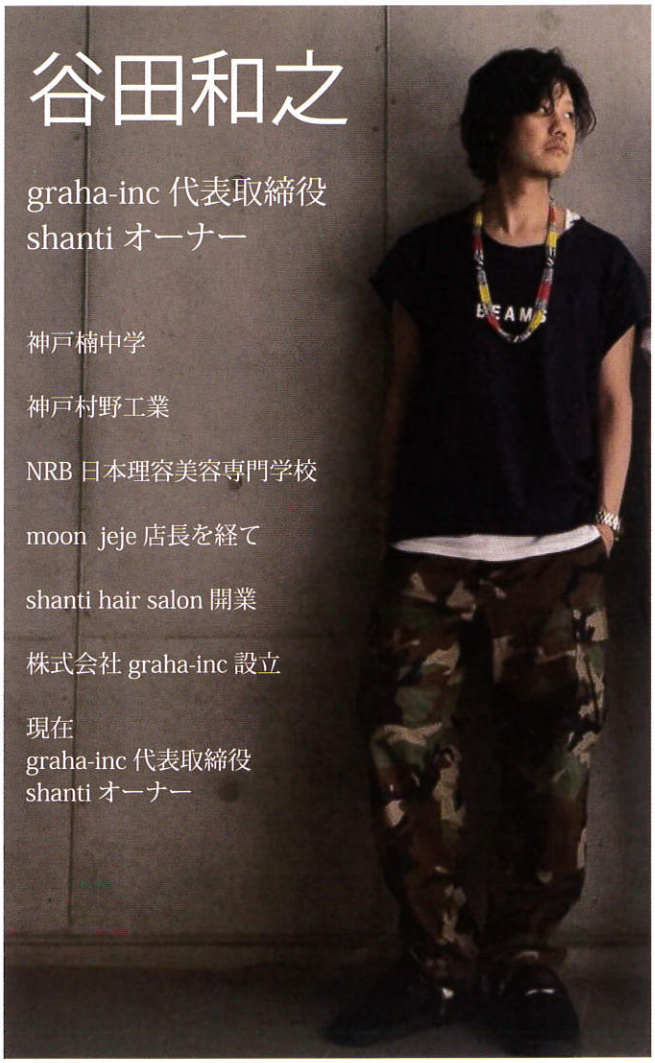
一番大切なことは乾かし方です。髪型を整えるのは、ドライヤーで乾かす時です。髪が濡れている状態でドライヤーを使って乾かしながら形を作っていきます。ドライヤーをする時には、なにか考えていますか？髪型を作るのは、スタイリング剤というイメージがあるかもしれませんが、スタイリング剤はドライヤーで作った髪型を維持する補助剤という位置付けです。君たちがスタイリング剤に持っている髪型を作るというイメージは、ドライヤーでできるんですよ。髪の毛というのは、金属と同じて、温めていく時に形が作れます。そして熱が冷めていく時に、形が固定していきます。濡れた髪の毛を乾かしていく時に、形ができていきます。ですから、乾かす時にどのような形にしたいかをイメージすることが大切です。そして、最後に冷風やセットモードで冷やしてください。ドライヤーに、冷風やセットというモードがあるのは、形を固定するためです。

美容室で頼む時にはどのようにすることが大切でしょうか。

髪型で大切なことは、清潔感を出すことです。人に与える印象もそうですし、自分自身の姿に誇りを覚えることも重要です。ですから、自分の好きなイメージを伝えて、その髪型が人にどのような印象になるかを美容師さんと相談することが大切だと思います。最初は、軽くしてもらったり、動きが作りやすくしてもらうことを伝えてみてはどうでしょうか。

動きのある髪型に憧れています。髪の毛に動きを出すテクニックを教えてください。

女の子のセットの時の技術としては、ネジネジという乾かし方があります。三つ編みを作って寝たりすると動きができたりしますが、動き過ぎてしまうことが難点です。ドライヤーで作っていくことができます。髪が湿っている状態で、少し束を作ってそれをひねります。そして温かいドライヤーで温めて、そしてそれを冷風で冷やしていきます。すると、動きを作ることができます。細かくそれを繰り返していくと全体に動きを出すことができます。上の方は、少し上に引っ張っていきます。繰り返しになりますが、ワックスなどのスタイリング剤は、ドライヤーで作った形を維持したりする補助剤です。大切なことは、最初にドライヤーで動きや形を作ることです。大学生になったりすると自然に髪型を作ったりするようになると思います。その時のために覚えておいてください。



谷田和之

graha-inc 代表取締役
shanti オーナー

神戸楠中学

神戸村野工業

NRB 日本理容美容専門学校

moon jeje 店長を経て

shanti hair salon 開業

株式会社 graha-inc 設立

現在
graha-inc 代表取締役
shanti オーナー

美容師を志した理由を教えてください。

なにかクリエイトする仕事がしたくて、アパレルと料理人と美容師で考えていました。学生の頃から、人とコミュニケーションをとることが好きで、お客さんと一番近くで関われて、喜んでくれる反応を見ることができる、この美容師という職業を選びました。
今は、社会の中で心配や不安を抱えている人になにか良い影響を与えたいと思っています。なにか少しでも社会のために働きたいと思っています。

社会に出るために必要なことはなんだと思いますか。

努力は報われることを知ることです。世の中には、努力した人しかいません。天才はいないと思います。秀才しかいないと思います。秀才には、かならず努力が必要です。目指しているものがあれば、一生懸命することです。一生懸命することはかならず報われると思います。学生の間にたくさんのことを学びましょう。そして、社会に出て、なにかを成し遂げた時がお世話になった先生への恩返しになると思います。

中学生と大人のおしゃれの違いは何だと思いますか。

フォーマルという言葉があります。社会の中でのふさわしい身だしなみ、ふるまいを指す言葉です。これは好きとか嫌いとかではなく、社会人としてあるべき姿を考えるものです。社会人としての身だしなみはこれに従わなければなりません。社会人で、たとえば営業の人で髪型が整っていないと、仕事を得ることができなくなる可能性もあります。ですから大人は面倒くさくても、身だしなみは整えなければならないのです。
大人にとっての身だしなみは、フォーマルに従う事です。学生にとっての身だしなみは、校則に従うことです。校則をまもることが、学生にとっては身だしなみだと僕は思います。

中学生にメッセージをお願いします。

大人になると、学生時代にもっと学んでおけばよかったと思います。「学びたい」という思いが強くなります。美容師は、派手なところが注目されますが、社会の流れや出来事にも関心を高く持っている必要があります。でもそれは、社会人になったからといって身につくものではありません。ですから学生時代に、たくさんのことを学んでください。努力を続けていってください。